

# 『伊勢物語』の解釈と挿絵：住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」を中心として

著者	青木 賜鶴子
引用	百舌鳥国文. 2021, 30, P.151-160
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00017432">http://doi.org/10.24729/00017432</a>

# 『伊勢物語』の解釈と挿絵

## ——住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」を中心として——

青木 賜鶴子

### はじめに

東京国立博物館所蔵の住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」(以下「如慶本」と略称する)は、全章段の詞書と八〇場面の絵を具える六巻の絵巻であり、絵画場面の多さに加えて、絵の表現や伝来の確かさにおいても、現存絵巻・絵本中屈指のものである。

制作について確認しておく、第一巻く六巻の末尾の絵に「住吉法橋如慶筆」、第六巻詞書の後の尾紙に「左中将通福書之」とあり、絵は住吉如慶(一五九八く一六七〇)、詞は愛宕通福(一六三四く九九、任左中将は一六六一)の筆で、如慶が住吉を名乗った寛文三年(一六六三)以降の晩年の作とわかる。

また伝来については、『寛政重修諸家譜』巻第七二五、津

軽家五代藩主信尋の項に「延宝四年十月二十一日うちうち高厳院の御遺物住吉法橋如慶の画に、左中将通福詞書の伊勢物語、ならびに匂箱をたまひ」とあって、高厳院すなわち四代將軍徳川家綱の正室であった伏見宮貞清親王の息女・顕子女王(一六四〇く七六)の遺愛の品と知られる。高厳院は延宝四年(一六七六)薨去、九月上野東叡山へ葬送された。絵巻が下賜されたのはその翌月である。

このように如慶本は絵師・詞書筆者・伝来が明らかである点貴重であり、思文閣出版刊『住吉如慶筆伊勢物語絵巻』に、全章段の絵・詞書・解説・論考を収載し、稿者も一部を担当した。如慶本の概要と特色については右の書籍で紹介されているので割愛し、本稿では、如慶本を中心に、中世から近世初期の堂上あるいは公家における『伊勢物語』理解に注目しながら、『伊勢物語』の解釈と絵画との関わりについて検討したいと思う。

如慶本は、おおむねは細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』の解釈に従って絵面化されていると見てよさそうである。一例として、第六十五段「つとめて、とのもづかさのみるに、杳はとりて、奥に投げ入れて、のぼりぬ」の場面を取り上げる。『闕疑抄』に、

此所、心得ぬ事は、もと／＼は事の外に勞してもてあつかひしなり。『愚見抄』には、二条の後の里は忠仁公の亭なれば、とのもづかさも行かよふべきと有。それは彷彿なり。つとめてといふにて心えられたる事也。この里へ行かよふ体なり。つとめては、翌朝、殿上へかへりての事なり。むかしは殿上人、貫首をはじめて殿上に宿直してあるなり。日給の簡も、毎日の御番也。又、宿侍といふも、よるの事なり。されは、昼夜の事を上日上夜といひて、年中をしるして、其勞を知也。番と云は、今こそあれ、もとは殿上人は日々に参加して、御前の事を私に番々を定て、四位五位ありたる事也。よるなど殿上人おほき時には、おくへ台盤をやりて、畳をよせてしき、又幕あり、夜はたれ昼はまきなどするなり。此時、業平、殿上に有体をして、女の

里へ行て、明る日とく帰りて、主殿司のみるに、くつをおくへなげ入て、夜はこゝに詰たるかほしてゐるなり。か様に見れば、何のざうさもなき也。主殿寮と云は、御殿をつかさとるもの也。其身、堂上せざるゆへに、其寮より女嬬といふ女をたて、御殿の事を役する也。殿上人などにもつかはれなどして有もの也。『後宮職員令』曰、(以下略)とあり、如慶本(挿図1)は、清涼殿の台盤や天皇の椅子、日給の簡なども丁寧に描いたうえで、杳を手に持つて殿上(4)の間に昇る男と、それを物陰から見る女官を描いている。

一条兼良の『伊勢物語愚見抄』は、「とのもづかさ」を「主殿司の女嬬也。殿上などはきのこふ女官也」としつつ、女の里で目撃されたと考えているため、内裏にいるはずの主殿司の女官が女の里にいるのは「わたくしの用にきかよふ」のだと説明していた。『闕疑抄』はそれを否定し、「つとめて」以降は女の里から翌朝殿上に帰ってからのことであると、現在と同様の解釈を述べている。

これは三条西実隆の講釈を清原



挿図1

宣賢が聞書した『伊勢物語惟清抄』を踏襲したものであり、宗祇の講釈を肖柏が聞書した『伊勢物語肖聞抄』文明九年本までには、『愚見抄』と同様、主殿司が女の里にいるのは不審としていた。『肖聞抄』延徳三年本になると、右の説が「今案」の形で提示され、「此儀三西御同心也」ともあるので、宗祇から三条西実隆の周辺で言われはじめた、室町時代にさかのぼる説であることがわかる。

この場面の絵が残るのは、中尾家本（挿図2）と甲子園学院本（挿図3）である。中尾家本は、室内にいる女に「二条のきさき、二人の男にそれぞれ「なりひら」「とのもつかさ」と注記している。「とのもつかさ」を男性とし、女の里で目撃されたとするのは、いわゆる冷泉家流の注に「トノモツカサノミルトハ、主殿ノ頭伴ノ善雄ガ見ヲバシラデ、沓ヲバ御ヘ屋ノ奥ヘ抛入テ、后ノ御ヘヤニ隠入ヲ云也。」（十卷本伊勢物語注）とあるような、鎌倉時代の古



挿図 2



挿図 3

注の理解による。甲子園学院本は建物に入ろうとする男とそれを見る女官を描くので、おそらく『闕疑抄』のような室町時代の旧注によるのだろうが、手に持っているのは草履であり物語本文にはそぐわない。

もう一例。第十二段は、人の娘を盗んで、武蔵野に逃げてくる話であるが、

…女をば草むらの中に置きて、逃げにけり。みちくる人、「この野は、盗人あなり」とて、火つけむとす。

の「みちくる人」について、『闕疑抄』に、

みちくる人、御説、満くる、道くる、両説也と云々。

とある。注釈史においては、兼良の『愚見抄』に「満くる人也。くにかみの従類とも、野にみちく〜て来也」とあるように、宗祇までは「満ちくる」説であり、「野に満ち満ちてくる人、たくさんの人」の意とさ



挿図 4

れていたが、『惟清抄』天文十七年宣賢自筆本に「ミチクル人・満クル人也。〔遣遥院御講。称名院御講、満クル人・道クル人、両説〕」とあり、実隆の講釈は「満くる人」、その息公条の説が「満くる人・道くる人」の両説であつたことがわかる。

如慶本(挿図4)には、それまでの絵巻・絵本に描かれていた、武蔵野の草むらに隠れる男女と追つ手のほか、野原の中に道のようなものが描かれ、画面左の小道には、旅装束の男性二人が歩いている。武蔵野の中にわざわざ道を描くものはほかに知られないから、如慶本は、「道くる人」の理解に基づくのではないだろうか。

ただし、「道来る人」説を取る注釈書はあまり多くない。北村季吟の『伊勢物語拾穂抄』が「師」説として「道来る人なり」をあげるが、ほかは、「両説」とするか、「満ち来る人」を取る方がむしろ多いようである。<sup>⑤</sup>

## 一一

第十四段は、陸奥の女との話である。男は田舎じみた女が気に入らず夜深いうちに帰ってしまう



挿図5

が、女は、鶏が早く鳴いたせいだと鶏を罵り、男の「栗原の姉齒の松の人ならば都のつとにいざといはましを」の歌を、気に入られたと勘違いして喜ぶ。如慶本(挿図5)は、帰ろうとして振り返る男と、簀子の際に立つて男を見送る女を描いている。<sup>⑥</sup>

諸本の絵は、男が振り返るものと振り返らないもの、女が見送るものと後ろを向くものに大きく分けることができる。振り返らずまっすぐ前を向いて(帰る男)と(後ろを向く女)を描くのは、大英図書館本、小野家本、嵯峨本(挿図6)などである。一方、(帰る男)と(見送る女)を描くのは、異本絵巻、中之島香雪美術館所蔵「伊勢物語図色紙」(挿図7)、チェスター・ビーター本などがある。そして如慶本と同じく、(振り返る男)と(見送る女)を



挿図6



挿図7



挿図8



挿図9

描くものとして、久保惣本（挿図8）、中尾家本（挿図9）、齋宮歴史博物館本などがある。

久保惣本や如慶本などに描かれる〈振り返る男〉と〈見送る女〉について、仲町啓子氏は、（物語の内容とは必ずしも合わないが）「後朝の別れを惜しむかのような風情を醸し出す」と述べておられる。<sup>7)</sup> 男女が見つめ合う如慶本や中尾家本の図様は、後朝の別れを惜しむかのような風情がいつそう強くあらわされているとも言える。

この、後朝の別れを惜しむような描写は、現在の解釈によればたしかに物語の内容とは合わないのだが、『闕疑抄』などに見える室町時代の『伊勢物語』理解を考えれば、必ずしも合わないとは言いい切れないように思われる。

室町時代後期に主流であった宗祇・三条西家流注釈の特色として、好色否定と教訓性を指摘することができ、主人公業平は、女をおとしめない、憐憫する人物とされてきた。<sup>8)</sup> それは『闕疑抄』に至っても同様であり、

さすかに哀とや、業平の人をすてぬ心見えたり。夜ふかく  
出にければ、心とめん様もなきか、明るをまたで出る也。

などに続けて、男の「くりはらの」の歌の注では、

…（略）…さそはれて行べき人ならば、都のつとにさそは

んものをと詞をそへていへば、心得らる也。又、松のごとく  
主なき人ならば、友なふ義も有べし。…（略）…

と述べている。「誘うべき人なら」という現代と同様の解釈とあわせて、「あるじのいない人であつたら誘うのに」と、女を一方的におとしめない、慈悲深い人物として理解しようとしていることがわかる。宗祇・三条西家流注釈において繰り返し強調される〈憐憫する業平〉であるが、この解釈は、宗祇・三条西家流以外の注釈にも見られるので、この時代の一般的な受け取り方と言えるかもしれない。如慶本が〈振り返る男〉と〈見送る女〉を描くのは、先行作の影響も受けつつ、〈憐憫する業平〉に相応しい「女を思いやる業平と、それに応じる女」を表現したのではないだろうか。

### 三

第二十一段の絵は、如慶本と他の絵巻・絵本とで大きく異なっている。

昔、男、女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかり  
けり。さるを、いかなることかありけむ、いささかなることにつけて、世の中をうしと思ひて、出でていなむと思ひ  
て、かかる歌をなむよみて、物に書きつけたる、

出でていなば心かるしといひやせむ世のありさまを人は知らねば

とよみをきて出でていにけり。

この女、かく書きをきたるを、けしう、心をくべきこともおぼえぬを、何によりてかかからむと、いといたう泣きて、いづかたに求めゆかむと、門に出でて、と見、かう見、見れど、いづこをはかりともおぼえざりければ、かへり入りて、

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我やすまひし

といひて、ながめをり。(下略)

深く思いあつていた男女であったが、ふとしたことで思い悩んだ女が出て行ってしまふ。諸本の絵は、A「とよみをきて出でていにけり」の場面として、侍女を連れて家を出る女



挿図 12



挿図 11



挿図 10

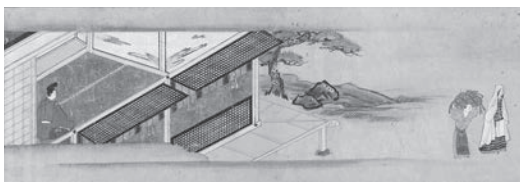
を描くもの、B「門に出でて、と見、かう見、見れど」の場面として、門の外に出て女を探す男を描くもの、C一人残された男が「思ふかひなき世なりけり…」と歌を詠み、物思いにふける様子を描くもの、などがある。

甲子園学院本(挿図10)はAとB、中尾家本(挿図11・12)はAとC、スペンサー・コレクション本絵巻(挿図13)もAとCを描いている。

如慶本(挿図14)は、これらとはまったく異なつて、室内で手紙をしたためる女と、驚いた様子の女房を描き、思いつめた女が「出でていなば」の歌をしたためている場面と思われる。几帳の傍らには琴が無造作に置かれ、女にとつて何か性急な事態が生じたことが



挿図 14



挿図 13

感じられる。女房は、女の唐突な行動に、口を大きく開けて驚きを示している。

如慶本が描くのは、他本が描くABCの場面よりも前、家を出る決意をした直後の女の様子であり、他本に比べて女の心情により注目したものと言えるだろう。

この段について『闕疑抄』は、  
いさゝかなる事につけて、少しの事に家を出でんとする、  
女の堪忍なき性なり。

と、女の心の持ちように言及している。これも『惟清抄』を踏襲する説であるが、宗祇・三条西家流の注釈では、〈憐憫する業平〉とともに、女性の生き方として〈貞女〉が強く推奨される<sup>(9)</sup>。如慶本の絵からは、この段の女の、〈貞女〉とは正反対の行為が、いかに唐突で周囲を驚かせるものであるか、驚く女房を通して、女の行為を非難がましく見つめる視線さえも読み取れそうである。女房は、女の周囲の人間の代弁者であると同時に、見る者の代弁者でもあるのだろう。

#### 四

最後に、如慶本が描いたものと、描かなかったものを通覧しておきたい。如慶本が描いた場面は、およそ次のようにまとめ

ることができよう。

(一) 祭や年中行事・名所・行幸など

(二) 人生の節目となる行事

(三) 男女の恋愛

まず、(一) 祭や年中行事・名所・行幸など。これらは、有名な章段であつたり、古くから絵にされてきた章段でもある。横長の広い画面を使い、如慶の有職の知識や「年中行事絵巻」の模写等の経験が生かされた、見ごたえのあるものも多い。

東下り(第七段、第八段、第九段①八橋②宇津の山③富士の山④隅田川)、第六十六段「難波津」、第六十七段「花の林」、第六十八段「住吉の浜」、第六十六段「龍田川」、第九十九段「右近の馬場」(騎射)、第一百四段「賀茂の祭」、第七十六段「小塩の山」(大原野行啓)、第一百四段「芹川行幸」、第一百七段「住吉行幸」などである。

次に、(二) 人生の節目となる行事。第二十九段「春宮の女御の花の賀」、第九十七段堀川の大臣の四十賀、第七十九段「ちひろある影」で、第七十九段では出産を描いている。

第七十九段は、一族に親王(貞数親王)が生まれ、産養で親王の叔父にあたる主人公が歌を詠む段である。絵があるのは、中尾家本、チェスター・ビーティー本、斎宮歴史博物館本、甲



子園学院本などであるが、親王を描くか否かの違いはあるものの、すべて産養の宴の場面を描くのに対して、如慶本だけが出産の場面を描いている。すべて白色を基調とする産屋の様子など如慶筆「東照宮縁起絵巻」における家康誕生の場面との近似が指摘され、有職の知識を生かした如慶ならではの場面であるが、一族の繁栄を願う意図も込められているだろう。

そして最も多いのが(三)男女の恋愛である。第二十一段のように、男と添い遂げることなく家を出ようとすする女に厳しい目が向けられていることは既に述べたが、第六十三段「つくも髪」の女の姿は、白く薄い髪、額や口元の皴、垂れた目元など、残酷なまでにリアルに「老い」が表現されており、老いた女の恋を批判し訓戒する意図が認められるかもしれない。

一方、多くの絵巻・絵本が描くのに如慶本が描かない場面として、次のものがある。場面名のあとに、絵のある絵巻絵本を略称であげる。

第二十二段「千代を一夜に」大英・小野・中尾・嵯峨

第五十段「鳥の子」中尾・甲子園

同「行く水に数かく」大英・小野・嵯峨

第七十七段「安祥寺のみわざ」

異本・大英・小野・中尾・甲子園

第九十三段「高いやしき」

中尾・嵯峨・海の見える杜本・齋宮本

第一百九段「あだなる男の形見」

大英・小野・中尾・チェスター・嵯峨

第二百二十五段「つつひに行く道」中尾・嵯峨

このうち第五十段の「鳥の子」「行く水に数かく」は、ほかないものの例えとして歌の中に詠まれた、卵を十重ねる、あるいは「行く水に数かく」を絵にあらわしたもので、卵を積み重ねる図を描くもの、水に筆先をつけて字を書くさまを絵にしたものがある。如慶本は、このような、歌に詠まれた景色は描かず、基本的に実景を描く、ということになる。

また、第七十七段「安祥寺のみわざ」や第二百二十五段「つつひに行く道」のような、葬送や辞世など死を連想させるもの、第一百九段「あだなる男の形見」のような、浮気な主人公を思わせるようなものを避けたと思われる。

第二百二十五段を避けることについては、『闕疑抄』に、「御説に、つゝに行道とはとある段を、とある所にては、こゝをよみ残すと前々はいひつたへたり。然ども、堯孝などがあはれがりてよみけるより、近来は御講尺のよし、御物語也」とあり、じつさい三条西実隆や後水尾院の宮中での講釈で第二百二十五段

を読まなかったと伝えられることと軌を一にするであろう。

## おわりに

それでは、如慶本の描く場面を選んだのは誰なのだろうか。如慶本には、『闕疑抄』に受け継がれた室町時代以来の『伊勢物語』理解や業平像が反映していると見られることは既に述べたが、このようなものは、実はそれほど多くなく、順当な解釈をうかがわせる描写が大半である。これは見方を変えれば、室町時代の宗祇・三条西家流の解釈が、それほど的外していないということでもある。さらに、多くの絵巻・絵本が取り上げている場面であっても、如慶本は、本文のより正しい理解を示す場合も少なくない。たとえば、第八十七段「布引の滝」の場面は多くの絵巻・絵本が描いているが、

さる滝のかみに、わらうだの大ききとしてさし出でたる石あり。その石のうへにはしりかかる水は、小柑子・栗の大ききにてこぼれ落つ。

の本文に忠実に、円座の大ききの石に水が当たってしぶきが飛び散るさまを描くのは、現存本では如慶本だけである。

この絵巻の制作には、既存の絵に物足りなさを感じていた、伊勢物語に通暁した人物の関与があったのではないだろうか。

『伊勢物語』の解釈と挿絵 — 住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」を中心として —

作品は違うが、如慶が描いた歌仙絵の装束に中院通村によって訂正が加えられたことが下原美保氏『住吉派研究』で指摘されている。<sup>(13)</sup> 絵巻製作にあたってプロデューサーとして関わった人物がいても不思議ではない。その人物を特定する材料はいま持ち合わせていないが、宮中の行事や古今伝授を復活させ、如慶に勅命で「年中行事絵巻」を模写させた後水尾天皇の周辺などには有力な手掛かりにはなろうかと思う。

『伊勢物語』本文の引用は、学習院大学蔵藤原定家天福二年書写本（武蔵野書院影印）により、濁点・句読点等を付した。

『伊勢物語』注釈書の引用は笠間書院刊『伊勢物語古注釈大成』（二〇〇四年）刊行中）により、適宜濁点・句読点等を付した。

如慶本の画像は東京国立博物館情報アーカイブ公開デジタル画像による（<http://www.tnm.jp>）。それ以外の『伊勢物語』の絵巻・絵本の引用は、『伊勢物語絵巻絵本大成』（角川学芸出版、二〇〇七年）により、伝本の略称も同書に従う。中之島香雪美術館所蔵「伊勢物語図色紙」の画像は同館より提供を受けた。

（注）

- (1) 『新訂寛政重修諸家譜』第十二（続群書類従完成会、一九六五年）七五頁。
- (2) 『住吉如慶筆 伊勢物語絵巻』（伊勢物語絵巻研究会編、思文閣出版、二〇一九年）。
- (3) ただし、第十七段の「あるじ」は古来女性とされ、『闕疑抄』

も女性とするが、如慶本は男性として描いている。これは桜の花のもとに座る男性三人を描く大英図書館本や小野家本など先行作品の絵からの影響と考えられる（ただし小野家本などはおそらく本来は第二十九段「花の賀」の絵の錯簡）。注2の『住吉如慶筆 伊勢物語絵巻』及び前掲『伊勢物語絵巻絵本大成』参照。

- (4) なお赤澤真理氏「住吉如慶・具慶の物語絵にみる古代寝殿造への復古」『源氏物語絵にみる近世上流住宅史論』中央公論美術出版、二〇一〇年）に、清涼殿の図は『承安五節絵』によるとの指摘がある。

- (5) 公条の注釈書『伊抄 称名院注釈』は「満ち来る人。武蔵守の従類となるへし。」と「満ち来る」説をとる。後陽成天皇『伊勢物語愚案抄』「称 充滿してくる人といふ説、道来る人いづれにてもよろし、道 満ちくる人也」、後水尾天皇『伊勢物語御抄』「満の義よし、道は次の義也」などとあり「両説」あるいは「満ち来る」説がやや優勢。

- (6) 『源氏物語』若菜上の女三の宮のように、平安時代、女の立ち姿がはしたないとされたことも関係する。注2の「住吉如慶筆 伊勢物語絵巻」一四八頁（泉紀子氏執筆）に、如慶本の女が室内から一歩簀子に踏み出した姿は、女の積極性や男への執着を示すと指摘されている。

- (7) 仲町啓子氏「室町から江戸初期の伊勢物語絵制作」『伊勢物語 享受の展開』竹林舎、二〇一〇年）四〇八頁。仲町氏は桃山時代の土佐派系絵師の作とされる個人蔵「伊勢物語図屏風」や久保惣本、如慶本に〈振り返る男〉と〈見送る女〉が描かれていることを指摘されている。

- (8) 拙稿「室町後期伊勢物語注釈の方法―宗祇・三条西家流を中

心に―」『中古文学』第三四号、一九八四年一〇月。

- (9) 注8に同じ。

- (10) 注2の『住吉如慶筆 伊勢物語絵巻』二〇〇頁（河田昌之氏執筆）。

- (11) 拙稿「伊勢物語拾穂抄」の成立」『女子大文学』『国文篇』第三十八号、一九八七年三月）参照。

- (12) 注2の『住吉如慶筆 伊勢物語絵巻』二〇七頁（田中まさ氏執筆）。

- (13) 下原美保氏『住吉派研究』（藝華書院、二〇一七年）四四頁。

#### 〈付記〉

本稿は二〇一八年五月、中古文学会平成三十年度春季大会（於・日本大学）において『伊勢物語』の解釈と挿絵―住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」を中心として―と題して口頭発表した内容をもとに、後日の調査を加えて構成し直したものである。発表に際しご教示いただいた方々に御礼申し上げます。

本研究はJSPS科研費15K02221及び20K00192の助成を受けたものである。

貴重な作品の調査と画像使用をご許可くださった所蔵機関各位に厚く御礼申し上げます。

（あおき しづこ・本学教授）